

もいろいろな変遷があった。七十五歳になった今日、半世紀も過ぎた沖繩戦の思い出は忘却の彼方へと流れていく。しかし自分たちの土地が、故郷が主戦場となり、親兄弟、子供たちを失うなど、大きな犠牲を払った。本土復帰三十二年になった今日になっても、沖繩の人達にはなおその傷跡は癒えることはないと思う。

私が生きて今日あるのも、こういう人達の尊い犠牲の上にある。そして戦場での命の恩人達。あの撤退する混乱の最中「満尾、そこを動かすな」と言っ死ぬのは駄目だ。必ず迎えをやるからな」と言ってくれた弓取分隊長。「おい若いの。死ぬのはまだ早い。俺がみんなを説得するから引き返せ」と言って、濠に引き戻して下さった岡山県出身の山根軍曹の恩は決して忘れてはならないと決めている。そして死線を二人で潜り抜けた宮里さん。半世紀を過ぎ、十五歳から十八歳の記憶を辿りながら記述したもので、多少の誤謬はお許しの程お願いします。

石垣島 震洋特攻隊 戦記

滋賀県 西田 淳 男

私は、大正十二（一九二三）年十月二十八日、滋賀県栗東市小平井で生まれました。

昭和十八（一九四三）年五月一日、舞鶴海兵団入団。昭和二十年十二月、呉大竹港入港（駆逐艦）。同月十二日、故郷の実家へ帰り復員、と言うことで大東亜戦争に従軍出征した海軍軍人です。

私が軍人として御奉公に就いた当時の私の家は、水田八反で暮らす農家でした。家族は父母、弟（二人）妹（一人）と私の六人家族でした。

昭和も十八年となると、日本国中すべてを挙げて戦争一色となり、また最初は旗色の良かった戦況も次第に劣勢となり、制海、制空権も次第に敵の掌中に移り、国民全体が非常態勢でした。若い人は男女を問わず軍需産業に徴用され、ブラブラ

している遊休階級は一人もなく、特に若い男の姿など見えない位でした。

私にも徴用が来て、九州の三池炭坑へ引つ張られ、石炭掘りに明け暮れておりました。

私は二十歳に成長した昭和十八年に志願して軍務につく決心をして、徴兵検査で甲種合格となり、勇躍して海軍へ入る事となりました。そして昭和十八年五月一日、舞鶴海兵団へ入団しました。

志願通り機関兵となりました。新兵教育が始まります。総員集合。総員制裁でビンタ、尻たたき（直径七センチ位のカシの棒）です。無抵抗、無反撃のされっぱなし。何糞と歯を食いしばり、戦友互いに励まし合い、海軍魂を発揮して頑張りました。

あの苦痛、逆境を克服した不屈の信念と自信に支えられて、すべての困苦欠乏に堪え、私個人としましては「自分から志願したのだから、苦労は当たり前」と覚悟していました。

教育訓練では

一 駈け足

二 ボート漕ぎ（きつかった）

三 石炭操法（もつともきつかった）

四 銃剣術を含む陸戦訓練

五 水泳（湾内の遠泳）一班三十人

その他としては、ハンモックの吊り、畳で、新兵教育三カ月を振り返って最も苦しかったことは、三の石炭操法でした。この実技のみに休憩しながらの、学科の口答教育も併用でした。とにかく頑張りました。

昭和十八年八月十五日、軍艦「蒼鷹」に乗組みを命ぜられました。

呉海兵団仮入団中のところ、九月十八日に退団。

「さんとす丸」という貨物船の輸送船で、船内の蚕棚のように何段にも仮設された棚に収容されました。蒸し暑いことこの上なして、皆上半身はすべて裸体。特にWCは舷側の外へ木材で仮設され、便壺は大海である。そして手すりにつかまり海上

に宙吊りよろしく用を足す。これは経験した者でないとは分らない。

便乗して呉港を出て以下、二十一日門司発、二十八日馬公発、十月二日サイゴン着、五日昭南着、十二日スラバヤ着、十六日マカツサル着、十八日特根仮入隊、十月十九日の午食後に「蒼鷹」に乗艦しました。

軍艦「蒼鷹」は敷設艦で要項は次のようである。

敷設艦は防潜網を海中に垂らして敷設する軍艦。

排水量 一六〇〇トン、最大速力 二三ノット

任務は船団護衛、食糧軍需品運搬等

昭和十九年九月二十六日、フィリピン南西ブグスク 島付近にて沈没。

九月二十八日 昭和十九年六月二十七日、太平洋方面「戦務甲」。

「蒼鷹」に乗って二日目に敵の機雷に接触しました。そして航行中に航行不能となりました。ス

クリューが回転せず。沈むかと思つて不安でした。

駆逐艦に曳航され、約一週間かかって舞鶴へ帰港して修理しました。舞鶴では一週間の休暇が出て、実家へ帰れました。ちょうど、実家では田植の最中であり、手伝つて喜ばれました。六月の末だったと思います。

「履歴」には、次のようにあります。

昭和十九年

六月二十七日 舞鶴帰省。国内臨時勤務十一日

間

八月 四日 舞鶴海兵団に入団を命ず

十六日 海軍水雷学校付を命ず

十七日 入校（震洋講習員）三十人余

十六日 川棚警備隊付を命ず、戦務丁一

カ月

十七日 第三次震洋艇講習員・整備員を

命ず

九月 十五日 第三次震洋艇講習終了。大河原

部隊

十月十五日 石垣警備隊付を命ず

(十一月二十一日 「とよさか丸」便乗、

十二月五日 石垣島着、十二月六日 入隊)

十一月 一日 海軍上等機関兵を命ず

昭和二十年

五月 一日 海軍機関兵長を命ず

九月 一日 任海軍二等機関兵曹

石垣島における戦況を述べます。

昭和十九年十月十五日、石垣警備隊付(震洋特別攻撃隊)大河原部隊整備員。昭和二十年、終戦まで石垣島川平に駐屯しました。石垣島では私は地上の整備員でした。艇のエンジンを整備する役目です。エンジンはトヨタ自動車製のガソリンエンジンでした。隊員は整備関係で三十五人位でした。

震洋艇とは総ベニヤ板造りのモーターボートで、二五〇キロの爆装、乗員一〜二人、長さ五〜六・五メートル、速力(特別全力)は二三〜三二ノツ

ト等です。幸いにも一回の出撃もなく、乗員の特攻犠牲はありませんでした。出撃命令がなかった、その代わりと言っては変ですが、石垣島に対するアメリカ軍の攻撃は艦砲射撃、飛行機よりの銃爆撃と毎日盛んにやられました。日本軍は防空壕へ入って待避する一方だけの情けない様子でした。でも死者もない損害は全然ないということでした。

島の部隊の兵器、資材、食糧、酒その他海軍は備蓄が豊富で困ることはありませんでした。でも土を耕して米、イモ、野菜を作っては万一に備えました。島の住民もよく協力してくれてよかったです。

敵はアメリカの艦と飛行機よりの攻撃のみで、一方的に逃げて防空壕へ入っていればよし、腹がへって栄養失調になる事も、マラリアもなく、物は思いようで「極楽とまではいかぬが、まあまあ恵まれた所」でした。炎熱、寒冷の山野を悪戦苦闘して靖国街道、白骨街道をまで出現させた、あ

るいは玉砕部隊の皆様や英霊に対しては、誠に申し訳ないことです。

やがて運命の日、八月十五日を迎えます。私たちは、無線により八月十五日の即日、終戦を周知しました。混乱はありませんでした。指揮官の指導処置よろしきを得たのであらうと思います。

復員は三回に分かれて、駆逐艦に乗せられて博多と呉へ入港しました。私は第二回目で、昭和二十年十二月、呉の大竹港に入港、帰りました。

戦後、部隊員により戦友会「聖桜会」を結成、毎年盛大に行われています。「隊員の精神的支え、連携と懇親を通じて、会員と家族の幸福を念願する」と規約にあります。

私は戦後無事に生き延びて八十一歳となりました。元気です。妻は病弱でかわいそうです。子は女が一人のみ。その孫が三人います。皆元気で年寄りを大事にしてくれて、有り難いと感謝しています。私の戦後の経歴と言いますと、農協や組合

の役員、お寺の総代等です。お寺の関係は現在も続いております。